

## 三人笠地蔵

元八王子村鳥居場の妙觀寺境内においての三体の石仏を、笠（かさ）地蔵さまと呼んでおるが、地蔵さまは一体で、あとは阿弥陀さまとお釈迦さまじゃ。

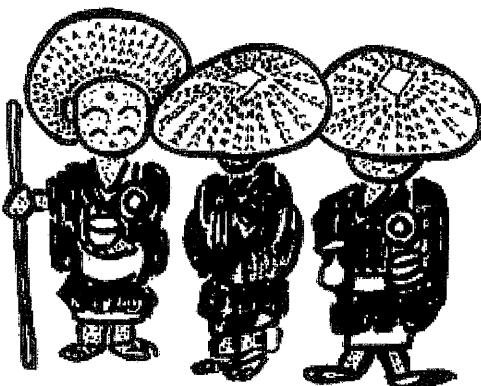
この辺りは、北条の家風をいただいて、年内餅（もち）をつかぬ習慣じゃ。これは、なんとも不便じやが、すると笠地蔵さまが、里人が困つておるのを見て、元旦の祝い餅などは、運んでくださることじや。

さて……ふだん、ご三仏がたく鉢にお出かけのときは、大石仏であるものだから、ドドン、ドドンと鳴りひびいてお出ましになる。そして、「ありがたい、ありがたい」と、それはそれは、にぎにぎしく布施をお受けなさる。

ところが、里人が困つておるときには、足音も立てん。

布施は、ありがたくなりいただき、法施をほどこすときは、知られぬようになさるという、ゆかしい仏さまじゃと。

法施をほどこして帰られる笠地蔵さまの後ろ姿を、そつと押むと、なんと、雪道に、足あともなしということじや。



## 縁起まんじゅう

夏日（なつび）の二十六日は、四ツ谷のお諏訪さまのお祭りじゃ。獅子（しし）舞いなどが奉納され、縁起のまんじゅう屋が軒をつらねるが、いざれも大繁盛となる。このまんじゅうを食うと、開運招福、息災延命といわれるからじや。

さて……、横山宿に、まんじゅうぎらいの娘がおつた。家は大店（おおだな）で、気立ても器量もよい娘だったが、なぜか縁遠かつた。

母ごが心配して、嶋之坊にご託宣を願うと、「一つ、わがままを言つておる」という宣示だつた。なんのことはない、まんじゅうぎらいのことと、物知りな老人が、「どんなまんじゅうぎらいも諏訪まんじゅうなら、うまいから、一つ食わせてみろよ」と、すめてくれた。

そこで娘にわけを話して、「一つでいいから」と食わせてみた。娘も、

母ごにいわれて食つてみたが、うわさどおりうまかつたと……。

はて、さて、縁談のことも、たちまち吉慶が結ばれたというから、うれしいことじや。



## 龍神と弁天

下一分方村の八日市場に西蓮寺という古刹があり、大日さまを祀（まつ）る本堂の欄間には、見事な龍神が彫刻されておつた。

この龍神が、夜な夜な、弁天池に出向くという。弁天さまに恋したという話じやつた。大日さまは愛染の道も司られるから、ほほえましいことじや。ところがその折、風雲を巻き上げるので、人馬や家屋や作物に被害が及んだものじや。

寺方や村の衆が困つておると、旅の坊さまが、「わしが、龍神をしずめましょ」といつて、弁天島に植えられた黄楊（つげ）の一枝を手折ると、楔（くさび）にけずつて、「やつ！」と、欄間にむかつて投げつけた。

楔は、龍神の胸に突きささつたが、見る間に、すつと消えたという。その後、龍神は抜け出すことがなかつたそじや。

このことがあつてより、西蓮寺に参詣（さんけい）して愛染祈願をすると、良縁がさずかるといわれたものじやよ。



## 虚空のしらべ



天から降ることく、りゅうりょうと尺八の音がながれてきた。ところは、二分方村の大沢川のほとりで、旅の男がふと足をとめたそじや。

「これは、虚空（こくう）のしらべ……」といふと、曲が聞こえてくる方へむかって歩み出した。

この男は、江戸の大盗賊で、鬼あざみという異名で知られた清吉という男じやつた。道は、秋の山路にかかり、やがて、草の戸の庵（いおり）に出た。沢水寺という額の下で、ひとりの坊さまが尺八を吹き続けていた。これは、禪の修行のうち、吹禪といふそじや。

清吉は、しらべに心を奪われて、いつまでも、坊さまの足下にうずくまつていたという。清吉の心にも、禪の心がしみ込んだものと思われる。

それから間もなく、鬼あざみの清吉が、奉行所に名乗り出て、小塙原で

梶首（さらしくび）になつたそじや。

悪運あくまで強かつた清吉が、なぜ名乗つて出たかは、いまも、なぞのまじやと。

## 六右エ門観音

二分方村に菅沼六右エ門さまと申される円熟のお方がおられた。学問はあるが昂（たか）ぶらず、財福なのに矯（おご）らず、近在の人々から敬われていた。

ある年、八王子宿からの帰り、由井野の原で夜になり、盜賊に襲われた。

そのとき、六右エ門さまは、身ぐるみ脱いだ着物を、きちんとたたんで賊にわたされたそうじや。

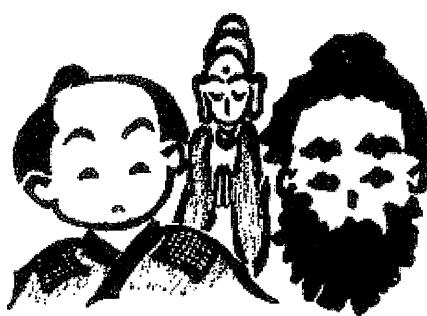
賊は、六右エ門さまの立派な振る舞いに心打たれて改心し、菅沼家の作男となつて働いたといふことじや。

六右エ門さまも、日ごろは作男たちと野良仕事に精を出し、汗を流しておられた。

この六右エ門さまは、大そう観音さまを信心なされ、朝に夕に観音経を念じておられたが、いつか、作男たちも唱和するようになつた。

「朝は、さわやかに、夕べは、疲れがとれた」ということじやつた。

二分方村の無量院は、六右エ門さまが開基なされた寺である。六右エ門観音と呼ばれ、円満利益、福德冥加といつて信心された。



## 華川の螢



螢の名所といえば、小宮の螢見橋とか、川口川の源平淵とか、百草の清涼台下など、いずれもよく知られておるが、華川（はなかわ）の螢も美しくともるので愛されてきた。

華川は、一本榎（エノキ）の根元から流れ出し、大樂寺村を通つて城山川に合流し、さらに浅川へそそいでいる。

むかし一本榎の下には、優しいお顔の地蔵さまがおられたそうじや。ある夏のこと、ひどい日照りで村の者が難波しておるのを見て、はらりと涙を流された。すると、おからだの石が解けて流れ、そのとき、夜空の満天の星も、一つ、すうつと流れたと……。

その晩、村の者たちは、「たくさん星が降るのう」と、空を見上げたそ  
うじや。

次の朝、人々はびっくりした。榎の下の地蔵さまは消えてなくなり、そ  
の代わりに、こんこんと泉が湧き、小川が流れ出していたという。

これが華川じや。そして、流れ星のように美しい螢が、たくさん夏の夜  
空を飾つたと。

## 天狗の鼻折れ

横川村には、そりや、でつかな屋敷があつて、天狗（てんぐ）屋敷といった。屋敷森は、慈根寺の森より鬱蒼（うつそう）としていた。

この屋敷森に、大学坊という鼻天狗が住まつておつた。こやつは、天地明暗の理に通じ、高尾山天狗より今熊山天狗より本宮山天狗より博識だつたから、大いに自慢して、「わしこそ天下一大天狗」と鼻高々であつたと……。

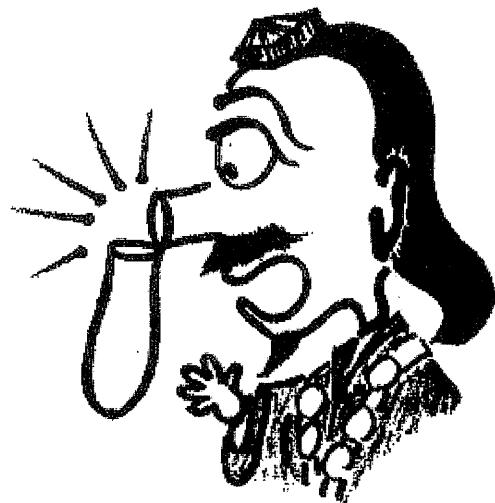
ところが、里人たちの、「いかな鼻天狗も、心源院のト山（ぼくさん）和尚にはかなうまい」というささやきが聞こえてきた。

「なにつ！ ト山」ときに」と、悔しがつた鼻天狗は、むりやり問答をふつかけた。

ほどほど困つたト山さまは、「ならば、心の重さを問う」と発問された。

鼻天狗は、あまりやさしい問い合わせないので、答えるに答えられず降伏した。

あとになつて、里人が、「心に重さがあるのですか」とたずねると、ト山さまは、「心を感じなければ、その重さも感じられまいよ」と、教えてくださいましたそつじゃ。



## 法力和尚

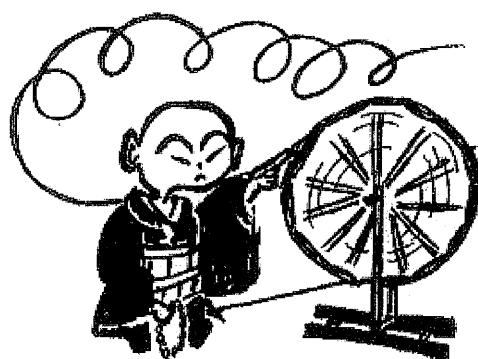
二分方村に、たいそう法力を身につけた知弁さんという坊さんがおられた。悪童が、とげをさして泣いておると、「ほいほい」と法力をかけて、とげを抜いてくださる。とげは、ノミのようになんで出たそじや。

村の道を、あばれ馬がくる。あわや、童女危うし！ と、その瞬間、さつと法力がかかり、馬は、童女の頭上を二間も飛びこしておったといふ。

ある風の強い日、農家の縁先で、婆さまが、糸車の糸をからませて困っていた。「とけん、ほどけん」となげいておると、知弁さまが、「まずは、わしにかしてみ」と、婆さまから糸口を受けとり、糸巻きを高く飛ばした。

糸は、風になびき、長くキラキラときらめいた。知弁さまは、風にむかって法力をかけた。と……カラカラと快い音をたてて、全部の糸が、糸巻きにおさまったという。

この坊さま、法力和尚と呼ばれたが、なんでも、入寂のときは、飛天光に導かれて西方へおいでなされたそじや。



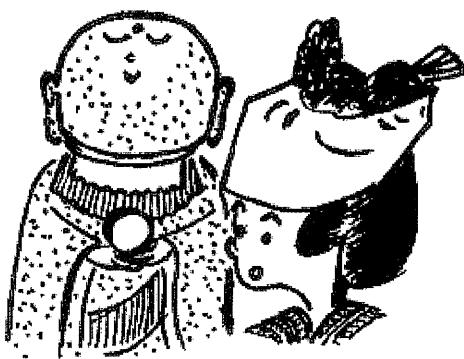
## おついで地蔵

元八王子の石神坂においての地蔵さまは、おついで地蔵と申されて、それは妙適なご利益があ  
いただけるそうじや。

ふつうの信心なら、殊勝に出むいて願掛けするものじやが、この地蔵さまにかぎっては、あ  
たりまえにはいかん。なにか用足しやら、仕事帰りやら……、たまたま通りかかつたならば、  
ついでに「ちょつとくら、たのみます」と願うと、万般あやまたず、念願成就するそうじや。

鍛冶屋村のミネという娘などは、はたらき者じやつたが縁遠かつたので、  
両親は心を痛めておつた。

ときに入幡宿へ所用に出たお袋さまが「ついでですまんことですが、娘  
の縁をたのみます」と祈つたものじや。すると、間もなく、長房村のお大  
尽(だいじん)から、またとない話があり、めでたく縁組できたそうじや。  
さて……、思い当たることは、ついでというのは、用足しやら仕事に精  
出してのことと、無精でいては、ついでのこともないということらしいぞ。



## 鼻取り如来

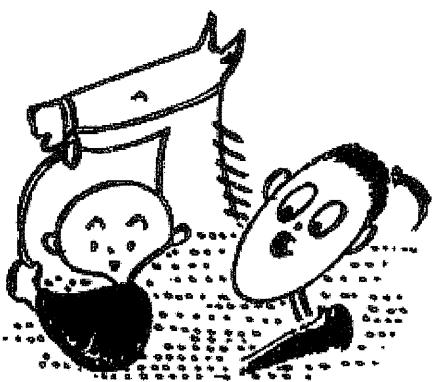
元八王子の御靈谷の妙觀寺には、わずかばかりの水田があつたが、下僕もいなくて、ひどく荒れておつたと。

ある年のこと、どこからか、ひとりの小僧がやってきて、「田を耕す、手助けをしましょ」と、坊さまにいった。坊さまは、小僧がいうままで川向かいの長者の邸を訪ね、「馬を一頭貸してください」と頼んだ。長者は、しぶしぶながら、とにかく馬を貸した。小僧は、巧みに馬の鼻取りをして、寺の田を耕した。

「これは、ありがたい」と、坊さまは大よろこび。

ところが気がつくと、小僧の姿がどこにもない。長者もやってきて、ともども探しした。すると、こともの足跡が、お堂へつづく。そして、本尊の如来さまの腰から下が泥だらけじやつたと。坊さまは、おどろき、涙を流して礼拝し、不信心だつた長者も心を打たれて、発心したそじや。

この如来さま、いまでは、故あつて、八王子宿大横町の極樂寺においてなさるとよ。



## 代官ギツネ

八王子の本郷宿からは、慈根寺村にわかれ古い往還があつて、そこから北へいくと、そりや、さびしい原じやつたと。

その原に、だれさまかは知らんが、代官屋敷の跡といわれる、ひどい荒れ屋があつた。実は、この荒れ屋に、古ギツネの眷(けん)族が住まつておつた。こやつら、悪きはするが、人を傷つけたりなんぞはせん。

久保宿の源兵衛の話じやと若い娘が、ほいほいと呼ぶもんで、その気の源兵衛がついていくと、すすきの原ん中に立派な屋敷があつたと。豪家な座敷に案内されて、大ごちそうになつた。酒もたんと出たそうじや。

その席に、袴(かみしも)の男が現れ、「わしは代官じや、代官じや」と、しきりにいがあるので、源兵衛も、うま酒をのみながら「代官さま、代官さま」といばらしておつたそうじや。

あとななつて、のんだ酒が小便じやつたとか、料理が馬の糞(ふん)だなんてことはなかつたということじや。いばらしておけば、いつの世も、酒が小便に変わることはないのかも知れんぞ。

